

# Nursing Professionalism: A National Survey of Professionalism among Japanese Nurses

田中, 理子

<https://doi.org/10.15017/1398280>

---

出版情報 : 九州大学, 2013, 博士 (看護学), 課程博士  
バージョン :  
権利関係 : 全文ファイル公表済

氏名・(本籍・国籍)	た なか みち こ 田 中 理 子 (福岡県)
学 位 の 種 類	博士 (看護学)
学 位 記 番 号	医博甲第2627号
学 位 授 与 の 日 付	平成25年5月31日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 医学系学府 保健学専攻
学 位 論 文 題 目	Nursing Professionalism: A National Survey of Professionalism among Japanese Nurses (日本における看護専門性の現状)
論 文 調 査 委 員	(主 査) 教 授 小 野 ミ ツ (副 査) 教 授 鳩 野 洋 子 教 授 樗 木 晶 子

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 【研究背景】

専門性（プロフェッショナリズム）とは専門的な特徴を示す行為、品質、そして目的であると定義され、通常はその専門員が期待される行動を示すといわれている。看護師は看護に専門性が存在するか否かについて多くの議論と研究を行うことによって、徐々にその専門性の基盤を確立させてきた。このように看護はこの30年で看護を取り巻く社会的変化と医療変化によってその役割と自律性を拡大し、劇的な変化を遂げるとともに、新しい資格認定制度と学位の規範を確立してきた。その結果、医療現場における看護師の存在の重要性は、今までにないほど大きくなっている。それに伴って、他国と同様に日本でも医療現場での看護専門化は顕著に要求されてきた。しかしながら、日本の看護師の看護専門性の現状については期待と反比例しており、その実態はほとんど知られておらず、専門性に基づく態度、知識、行動は明確に示されているとはいいがたい現状である。その原因として、看護の専門性に帰属する行動を評価する尺度は未だに存在しない点が指摘できる。そこで、日本の看護の専門性に帰属する評価尺度の開発が望まれるがその前段階として、日本の看護の専門性に帰属する行動に関する調査が必要であると考えられる。

本研究の目的は既存の尺度を応用し、日本の看護専門性に関する調査を行い、その基礎となる帰属行動の現状を検討することである。

### 【研究方法】

本研究は、日本の看護専門性の現状を調査するために、まず、第1段階として調査票開発のパイロットスタディーとして、Professionalism in Nursing Behavioral Inventory (PNBI)の日本語版を開発し、その信頼性と妥当性を検証した。第2段階ではPNBI日本語版を使用し、全国に353施設ある大学・大学病院からランダム抽出した44施設、2,758名の看護師・看護教員を対象に全国調査を実施した。

データ分析は、個人の属性およびPNBI日本語版の総合得点、各下位尺度に関する基本統計を算出した。またPNBI日本語版総合得点と学位、職位、経験年数、看護実践分野との関係をみるために一元配置分散分析を行い、有意差がみられた項目についてTukey-Kramer多重比較を行った。なお本調査分析は統計解析ソフトJMP9を用い有意確率は5%以下とした。なお、本研究は、九州大学病院倫理審査委員会の承認を受け実施した（許可番号22-107）。

### 【結果】

分析対象は1501件（有効回答率54.4%）であり、年齢は31歳～40歳が一番多く387名（25.8%）、臨床経験年数は平均12.5年、最終学歴は専門学校卒が34.4%を占めていた。看護実践分野は、内科・外科病棟816名（54.5%）が一番多かった。PNBI日本語版の総合得点は平均6.74点（SD±3.89）であった。下位尺度で最も得点が高かったのは「継続教育能力」（1.37点SD±0.74）で、最低点は「出版活動とコミュニケーション」（0.19点SD±0.58）であった。

学位の相違では PNBI 得点の差を検討するために一元配置分析を行った結果、学位と PNBI は有意差がみられた ( $F = 138.62, p < 0.0001$ )。Tukey-Kramer 多重比較によると専門学校卒と短大卒の間には有意な差はみられないが( $p = 0.853$ )、それ以外では学位が高くなるほど専門性の得点が高かった( $p < 0.0001$ )。

経験年数別では経験年数が 21 年以上の看護師は平均 9.53 点であり、PNBI 総合得点は最も高い数値であった。経験年数を水準とした一元配置分散分析によると経験年数と PNBI は有意な関係が示された( $F = 111.24, p < 0.0001$ )。Tukey-Kramer 多重比較では、経験年数が 0-5 年と 6-10 年では PNBI 総合得点に有意な差はないが( $p = 0.995$ )、それ以外のグループでは経験年数が増えるごとに総合得点が有意にあがるようになった( $p < 0.001$ )。

職位別の比較では、看護管理者の PNBI 総合得点が最も高い値であった。職位の違いと PNBI 得点の差を検討するために一元配置分散分析を行った結果、職位と PNBI は有意差がみられた( $p < 0.0001$ )。Tukey-Kramer 多重比較ではスタッフの PNBI が有意に低かった。また専門看護師・認定看護師と師長・副師長では PNBI に有意差はなかった( $p = 0.243$ )。

看護実践現場の違いによる PNBI の違いを見るために一元配置分析を行ったが有意差は見られなかった ( $p = 0.395$ )。

#### 【考察】

本研究では高学歴なほど高い看護専門性を示す結果が示唆された。この結果は単に専門性に学位が必要ということだけでなく、学位保持者は看護専門性が高いということであり、このことは質の高い看護実践が提供されることに繋がる。この点は患者にとって非常に有益である。

また、一方で看護の知識の全てを大学で習得するわけではない。むしろ仕事上の経験から習得されることが多いこともいわれている。本研究では、経験年数が 10 年以上の看護師では経験年数が増えるごとに有意に PNBI 総合得点が上昇していた。特に、「学位」以外の全ての下位尺度の得点は経験年数が増す毎に高くなっており、看護の専門性を向上させるためには経験という側面も重要な意義があると考えられる。経験年数による専門性を促進させるためにも、早期離職を予防するための工夫として、政治的調整、労働状況改善、環境管理等が今後更に必要となると考える。

本研究結果において、管理者と教育者は最近の研究結果と同じように高い専門性を有していた。日本においても看護管理者や教育者は全ての看護師の理想の看護リーダーとして、そして専門職である看護師の代表として認識されている。将来的には看護実践とアカデミックの両側面をバランス良く融合させて看護の専門性を発展させていくことが望ましいと考える。

#### 【結論】

本研究結果は日本で初めて世界と同レベルの尺度を用い看護専門性の現状を量的に示したものである。専門性の概念は発展を続けるので、この研究結果は日本の看護専門性を継続して評価するうえでの基礎的資料として活用可能である。米国と日本では看護の背景や文化が異なるが、看護の専門性は同じように重要視されている。この研究は日本の看護専門性に対する認識と知識を提供すると考える。

## 論文審査の結果の要旨

看護はこの 30 年で看護を取り巻く社会的変化と医療変化によってその役割と自律性を拡大し、劇的な変化を遂げてきた。しかしながら、日本の看護師の看護専門性の現状については、その実態はほとんど知られておらず、専門性に基づく態度、知識、行動は明確に示されているとはいえない現状である。そこで本研究では、米国で開発された看護の専門性尺度 PNBI (Professionalism in Nursing Behavioral Inventory) の日本語版を作成し、日本の看護専門性の現状を全国調査で明らか

かにすることを目的とした。

その方法として、第1段階ではPNBIの日本語版をバックトランスレーション手法を用いて作成した。分析対象は1014件（有効回答率76.0%）であり、信頼性の検証は信頼係数0.66、再テスト法は $r = 0.69 \sim 0.94$ であった。妥当性の検証では、基準関連妥当性のSpearmanの相関係数 $r = 0.41 \sim 0.46$ 、既知グループ法を用いた。構成概念妥当性では全ての比較項目が $p < 0.0001$ でモデルの適合度を確認した。第2段階ではPNBI日本語版を使用し、全国に353施設ある大学・大学病院からランダム抽出した44施設、2,758名の看護師・看護教員を対象に全国調査を実施した。その結果、1501件（有効回答率54.4%）を分析対象とした。PNBI日本語版の総合得点は平均6.74点（SD±3.89）であった。下位尺度で最も得点が高かったのは「継続教育能力」（1.37点SD±0.74）で、最低点は「出版活動とコミュニケーション」（0.19点SD±0.58）であった。学位とプロフェッショナルリズム得点（ $F = 138.62, p < 0.0001$ ）、経験年数とプロフェッショナルリズム得点（ $F = 111.24, p < 0.0001$ ）、職位とプロフェッショナルリズム得点（ $p < 0.0001$ ）に有意差がみられた。

これらの結果から、PNBI日本語版が信頼性と妥当性の基準を満たした有用性の高い尺度であること、大学、修士、博士と学位が上がるごとに専門性の上昇傾向がみられたことから、高い専門教育は質の高い看護実践の提供に繋がることが示唆された。また、経験年数が10年以上の看護師では経験年数が上がるごとに有意にPNBI総合得点が上昇していたことから、看護の専門性を向上させるためには経験という側面も重要な意義があるといえる。本研究は、世界で活用されている尺度を用い看護専門性の現状を量的に示したものであり、看護専門性を継続して評価するうえでの基礎的資料となるといえる。

以上、本研究は、看護の専門性を高めるのに有益な示唆を与え、看護学に貢献するところが大きいと考えられる。また学位論文調査会において、調査委員の試問に対して適切に解答をなしたことから、調査委員全員が一致して、本論文は博士（看護学）の学位を授与するに十分な価値あるものとして認めた。